

宝塚歌劇団生みの親

こばやし いちぞう

小林 一三 (1873-1957)

阪神急行電鉄 (阪急) ほか



『東京電燈株式会社  
開業五十年史』より

## § 人物データファイル

### 出生

明治6年(1873)1月3日、山梨県北巨摩郡韮崎町(現・韮崎市)に生まれる。生まれた月日から「一三」と命名される。生家は酒造業、絹問屋などを営む豊かな商家であった。

### 生い立ち

小林を産んで早くに母が亡くなり、養子であった父も実家に戻ったことから、姉と共に大叔父に育てられる。12歳で高等小学校を終え、私塾成器舎に入学するも病を得て退学。

15歳の年(明治21年)に上京し慶應義塾に学ぶ。この頃より小説の執筆を始める。また、芝居の面白さにも開眼し、足繁く劇場に通う。

### 実業家以前

明治25年(1892)19歳で慶應義塾を卒業。都新聞に入社の話があったが実現せず、翌年三井銀行に入社し、東京本店秘書課に勤務する。その後大阪支店、名古屋支店等を経て、明治35年(1902)本店調査係検査主任となる。その頃三井物産、三越呉服店へ好条件で入社の話が持ち上がるも、いずれも実現に至らず。

明治33年(1900)、27歳で丹羽こうと結婚、3男2女をもうける。

### 実業家時代

明治40年(1907)三井銀行を退社し、新設の証券会社の支配人となるべく一家で大阪に居を移す。しかし株の暴落で証券会社は設立されなかった。同年、三井銀行時代の上司で当時北浜銀行頭取であった岩下清周きよちからの勧めで、箕面有馬電気軌道株式会社の追加発起人となる。同社の創立総会に於

いて専務取締役役に就任する。

明治43年（1910）の鉄道の開通に先駆け、小林は当時としては前例のなかったPRを行う。『最も有望なる電車』という37頁の小冊子を作成し、大阪市内に配布したのである。さらに農村地帯であった沿線に、大阪に通勤する人たちのための住宅を建設した。当時の大阪は日清・日露戦争後の経済発展により、人口が飛躍的に増加していた。そうして増えた人々に住むべき場所を提供すべく、住宅地を開発したのである。そこに住む人々が大阪に仕事に出かける際に使うのは、電車である。この住宅地PRにも、小林は『如何なる土地を選ぶか 如何なる家屋に住むべきか 一住宅地ご案内』と題されたパンフレットを作成、活用した。

明治44年（1911）には終点の宝塚に温泉と娯楽施設を一つにした宝塚新温泉を開設した。それまでひなびた温泉地であった宝塚には、電車に乗って多くの観光客が訪れるようになった。

さらに大正14年（1925）には始発の梅田駅ターミナルビルに、マーケットを開業した。品揃えの豊富さと商品の価格を抑えた販売が評判を呼び、マーケットは業績を伸ばした。これがのちの昭和4年（1929）に、阪急百貨店になる。日本はいうに及ばず、世界初ともいえるターミナルデパートの誕生である。

大正7年（1918）箕面有馬電気軌道株式会社は阪神急行電鉄株式会社と社名変更し、その後路線を増やす。昭和2年（1927）に小林は同社の取締役社長に就任。さらにこの年には、請われて東京電燈株式会社の取締役（副社長を経て昭和8年に社長）となり、同社の再興に努めた。

昭和11年（1936）には阪急職業野球団（のちの阪急ブレーブス、現・オリックス・バファローズ）を誕生させた。同年日本職業野球連盟が結成され、同球団はその翌年から始まったリーグ戦に参加。当初は宝塚運動場（のちの宝塚ファミリーランド内）をホームグラウンドとしたが、その後昭和12年（1937）に開場した西宮球場に本拠地を移した。

それに先がけて昭和7年（1932）、小林は株式会社東京宝塚劇場の創立に名を連ね、取締役会の互選により取締役社長に就任した。昭和9年

(1934) 同劇場が竣工。こけら落とし公演として宝塚少女歌劇団（現・宝塚歌劇団★）のレビュー等が上演された。3年後の昭和12年（1937）には東宝映画株式会社の創立と、興行界へも着々と進出を続けた。

昭和14年（1939）には東京電燈株式会社と古河電工株式会社の連携による日本軽金属株式会社を設立するなどして、「今太閤」と呼ばれた。

## 政治との関わり

昭和15年（1940）、第2次近衛文麿内閣の商工大臣に就任する。翌年辞任するも貴族院議員に勅選された。更に終戦後の昭和20年（1945）には幣原喜重郎内閣の国務大臣、戦災処理のために新設された戦災復興院総裁を務める。昭和21年（1946）公職追放。昭和26年（1951）公職追放を解除される。

## 社会・文化貢献

与謝蕪村、呉春をはじめとする中近世の絵画、絵巻、古筆、陶磁器など、小林が収集した美術品は5000点にも及ぶ。小林自身、それらを一般公開することを計画していたが、生前に果たすことかなわず、遺志を汲んで、昭和32年（1957）に彼の雅号「逸翁」を館名に冠した逸翁美術館が開館した。なお、美術館は当初、旧小林邸であった大阪府池田市の雅俗山荘に置かれていたが、平成21年（2009）に名称はそのままに、同市内の新美術館に移転した。雅俗山荘は現在、彼の業績を紹介する小林一三記念館として公開されている。

また、池田市内には演劇や阪急電鉄関係の資料を中心に収集、公開している池田文庫があるが、同文庫は小林が宝塚温泉内に設けた宝塚文芸図書館を受け継いでいる。文芸図書館の前身にあたる図書室は、開架式で新刊の図書や雑誌が楽しめる施設であったという。

## 晩年

昭和26年（1951）公職追放を解除されて後の小林は、東宝の社長に再び咲く。しかし4年後にはその座を長男富佐雄に譲る。その翌年の昭和31年（1956）に新宿コマ・スタジアム、梅田コマ・スタジアムを設立し、双方の社長に就任するも、昭和32年（1957）1月25日夜、池田市の自宅で急性

心臓性喘息のため逝去。享年84歳。葬儀は本人の生前の希望に従い宝塚大劇場で宝塚音楽学校葬として、歌劇団生徒のほか、財界、興行関係者3千数百人が参列して執り行われた。死の翌年に池田市五月山山麓の大廣寺に葬られた。

## 関係人物

**松永安左エ門** 「電力の鬼」松永安左エ門は同じ慶應義塾の出身であり、共に茶道に親しむ友人であったが、東京電燈株式会社取締役時代の小林にとっては商売仇と言える存在でもあった。小林の没後に開かれた「逸翁追善茶会」では畠山一清（荏原製作所創業者）、五島慶太とともに懸釜を担当し、『小林一三翁の追想』では半世紀にわたる小林とのつきあいについて語っている。

**岩下清周** 岩下は小林の三井銀行大阪支店時代の支店長であった。小林にとって岩下は上司というよりも「師」と言えるほどの存在だったが、岩下は左遷を機に支店長就任1年で三井銀行を退社。北浜銀行設立に参加した。同様に三井銀行退社後大阪に移り住んだものの、あてにしていた職を得ることができずにいた小林に、救いの手を差し伸べたのが、岩下であった。彼との出会いが小林に実業家への途を拓いたといえる。岩下は箕面有馬電気軌道の初代社長のほか、大阪電気軌道（現・近畿日本鉄道）の2代目社長を務めるなどし、その間小林以外にも多くの実業家を育てた。

**五島慶太** 矢野恒太（第一生命保険会社創業者）より依頼されて荏原電気鉄道の重役会に関わるようになった小林に請われて、同社の専務を務めた。それが、五島がのちの東京急行電鉄の創始者への道を歩む契機となった。前述のとおり「逸翁追善茶会」で懸釜を担当した一人。

**根津嘉一郎** 「鉄道王」根津嘉一郎は小林と同郷の山梨県の生まれ。箕面有馬電気軌道設立に際して、新しい株主を見つける必要に迫られた小林が頼ったのが、同郷の実業家たちだった。根津も小林の依頼を受け、株式の引き取りに協力した一人であった。ともに鉄道会社の経営に関わり、古美術を好む、など共通点が多い。根津の死後に刊行された『根津嘉一郎』

(東海出版社 1941) の中で、小林は根津の思い出として、彼が藝阿彌の絵画を入手した経緯について語っている。それは根津本人から小林が「しばしばかされた翁御自慢の天狗物語 (p248)」だという。

## エピソード

一時期小林は小説家を志していた。明治23年(1890) 東洋英和女学院校長の殺害事件に取材した小説を執筆し、「山梨日日新聞」で連載を始める。事件発生から日が浅かったため、小林は麻布警察署より取り調べを受け、連載は中断の憂き目を見ることとなった。

小林は北大路魯山人の陶器を高く評価していたという。昭和6年(1931) から昭和18年(1943) にかけて魯山人が小林にあてた書簡数通が、平成22年(2010) に発見された。それまでは好意的な文面であった手紙が、昭和18年(1943) 10月の2通では一転、陶器の価格についての小林の発言に怒り心頭の魯山人が絶縁を宣言した内容で、それ以降の手紙は発見されていない。

## キーワード

**宝塚歌劇団** 前述のとおり、箕面有馬電気軌道が開通し、その旅客誘致のため小林は終点の宝塚に一大娯楽施設を開業させた。大正3年(1914) 施設内のプールを改装したパラダイス劇場で、少女だけで組織された宝塚唱歌隊の初公演が行われた。その後唱歌隊は宝塚少女歌劇団と名を変え、さらに昭和15年(1940) 宝塚歌劇団と改称された。この間に東京宝塚劇場が開場、東京への本格的な進出を果たした。歌劇団の活動は今に続き、平成26年(2014) には創立100周年を迎える。

小林は歌劇団のために上演作品の脚本執筆も行っている。大正3年(1914) の「紅葉狩」に始まり、昭和20年(1945) の「新大津繪」まで、中断した時期があるものの、20本以上の作品を残した。

## 神奈川との関わり

慶應義塾時代に寄宿していた童子寮の遠足で江の島、鎌倉に出かけた折、七里ヶ浜の大海原を見たという。小林はその時の印象を『逸翁自叙伝』の中で、「風もない好天気、どうしてあとからあとからと真白い波

濤が寄せて来るのか、その理由がわからない (p3)」と記している。

小林が宝塚歌劇団のために執筆した作品の中には、『江の島物語』というタイトルのものが含まれる。

## § 文献案内

### 著作

小林は多くの著作を残している。その中には小説、随筆、劇論、戯曲集や茶道論なども含まれる。ここではまとまったもの、自伝的なものを紹介する。

『私の行き方』小林一三著 斗南書院 1935 (K)

『逸翁自叙伝 青春そして阪急を語る』小林一三著 産業経済新聞社 1953 (Y)

昭和26年(1951)に『週刊サンケイ』の求めに応じて執筆された回顧録。小林自らの筆で、来し方が率直に記されている。本書は阪急電鉄(2000(K))等から復刊されている。

『小林一三全集』全7巻 小林一三著 ダイヤモンド社 1961～1962  
(Y、K ただし第2巻はKのみ)

『小林一三日記』全3巻 小林一三著 阪急電鉄 1991 (K)

### 社史

『75年のあゆみ』全2巻 阪急電鉄株式会社編 阪急電鉄 1982 (K)

《記述編》と《写真編》の2冊からなる。前者の「第1部 創業から50年」には、箕面有馬電気軌道草創期における小林の活躍が描かれている。また同書に収録された「創立75周年記念座談会」では、小林のひととなり語られていて興味深い。

『株式会社阪急百貨店25年史』阪急百貨店編 阪急百貨店 1976 (K)

『株式会社阪急百貨店50年史』50年史編集委員会編 阪急百貨店 1998 (K)

巻頭に掲載された「創業者 小林一三」には、彼の実業家としての人生がわかりやすく紹介されている。

『東京電燈株式会社開業五十年史』東京電燈 1936 (K)

- 『東京電燈株式会社史』 東京電燈株式会社編纂委員会 1956 〈Y、K〉
- 『東宝三十年史』 東宝株式会社編 東宝 1963 〈K〉
- 『東宝五十年史』 東宝五十年史編纂委員会編 東宝 1982 〈Y、K〉
- 『東宝75年のあゆみ ビジュアルで綴る3/4世紀』 『東宝75年のあゆみ  
ビジュアルで綴る3/4世紀』 編集委員会、東宝株式会社編 東宝 2010  
〈Y、K〉
- 『宝塚歌劇の60年』 (別冊あり) 宝塚歌劇団出版部編 宝塚歌劇団出版部  
1974 〈K〉
- 『宝塚歌劇の70年 記念出版』 宝塚歌劇団編 宝塚歌劇団 1984 〈K〉
- 『夢を描いて華やかに 宝塚歌劇80年史』 宝塚歌劇団編 宝塚歌劇団  
1994 〈Y、K〉
- 『すみれ花歳<sup>とし</sup>月を重ねて 宝塚歌劇90年史』 宝塚歌劇団 2004 〈Y、K〉
- 『日本軽金属五十年史』 日本軽金属株式会社社史編纂室編 日本軽金属  
1991 〈K〉
- 『梅田コマ・スタジアム36年のあゆみ 小林一三翁に捧ぐ』 コマ・スタ  
ジアム 1992 〈Y、K〉
- 『100年のあゆみ』 全2巻 阪急阪神ホールディングス株式会社グループ  
経営企画部 (広報担当) 編 阪急阪神ホールディングス 2008 〈K〉

## 伝記文献

- 『小林一三翁に教えられるもの』 清水雅著 梅田書房 1957 〈Y、K〉
- 『小林一三 (現代傳記全集8) 』 三宅晴輝著 日本書房 1959 〈Y、K〉
- 『小林一三翁の追想』 小林一三翁追想録編纂委員会編 小林一三翁追想録  
編纂委員会 1961 〈K〉
- 阪急、東宝、取引先の関係者から、親交のあった舞台関係者や趣味であった  
茶の湯の師範、子息まで、さまざまな人々が小林の生前の思い出を綴った1冊。  
図版、年譜も充実しており、小林一三という人物を立体的に捉えることができ  
る。
- 『わが小林一三 清く正しく美しく』 阪田寛夫著 河出書房新社 1983  
〈Y、K〉

『日本で最もユニークな経営者小林一三伝』 邱永漢著 日本経済新聞社  
1983 〈Y、K〉

## ¶ 参考文献

『根津嘉一郎』 宇野木忠著 東海出版社 1941 〈K〉

『逸翁清賞 名品図録』 逸翁美術館 1980 〈未所蔵〉

逸翁美術館の名品図録。昭和55年（1980）春に開催された「名品総合鑑賞展」の図録として刊行された。

「魯山人の『絶縁状』 『安く売れ』に反発、小林一三を罵倒」 読売新聞  
2010年10月9日 朝刊 13S 35面 〈Y、K〉

「池田文庫」 <http://www.ikedabunko.or.jp/top.html>

（参照2011-11-09）

「逸翁美術館」 <http://www.itsuo-museum.com/top.html>

（参照2011-11-09）

「小林一三記念館」（「逸翁美術館」HP内にあり）

<http://www.itsuo-museum.com/kinenkan/> （参照2011-11-09）

<岩沢美子>